

私の母ハツの妹ユリおばさんは、盛岡の町家群にある翹屋兼モツキリ酒屋の看板だ。

その街区に造詣の深い渡辺敏男さんが先週の本欄で「過疎で過去の歴史ご破算」と警鐘を鳴らされた。昨秋、たまたま私は紫波の生家を取り壊したので、それも含め感想を述べたい。

昨年十月に土地区画整理事業の一環で、一九二

家の造りであったことから、解体に至るまでに多くの方々から「これだけ立派な梁は今なかなか手に入らない」「障子戸に施された格子細工は見事だ」「石灯籠は珍重モノだ」など、さまざま感想が寄せられた。

それは「古きよきものをなんとか残したい」という、極めて自然な感情から発せられたものだった。

いわての

風

五(大正十四)年建造の生家と一九〇九(明治四十二)年生まれの土蔵が同時に解体され、それぞれ八十年から百年にもわたって果たしてきた役割を終えた。

同時に幹回り4材にもなるつとというクリの木、かつて自家水道の水源だった古井戸もすべて取り払われて更地となった。建物や庭が、当時の商

もちろん一番残したいと思っていたのは当の私かもしれない。

亡き祖父が財を投じたことを込めて建築整備したことや、在りし日の父が菜園の黒土作りに丹精込めたことなどを見聞きしていた。家屋や景観そのもの以上、そこにかかわった肉親への思いが重なり、かげがえのないものに思われ、正直あれも残したい、これも取っておきたいという気になった

地域に守られ百年 生家の取り壊し

関 洋一 一関市・企業世話人



感謝の気持ちで決断

のだ。

だが、特に歴史的にも学術的にもそれほど価値が有るわけではないと割り切れたこと、私自身のQOL(クオリティー・オブ・ライフ)暮らしの質的価値観では低位にあり、次世代にその暮らし向きを押し付けたくなかったことなどから、現状のまま保存するのはやめた。

折しも歴史的な価値があると思われる盛岡市内の旧陸軍兵舎や老舗酒屋の建物の解体や保存などにも大きな関心が寄せられて

ている。

しかし、忘れてはならないのは、そこで暮らす人や使用企業など当事者にとつての有用性の確認だ。そこには、使い勝手や歴史的価値認識なども要素として含まれるだろう。

また、仮に保存するにしても、その費用負担などが立ちほだかり、現実には簡単にはいかない。その点、生家の場合は、何のしがらみもなかったので、その処理策を独断ですんなり決めることができた。

一昨年秋季まで地域の皆さんに見守られて生家で一人暮らしをしていた母ハツにとって今お世話になっている老健施設がついのすみかとなりそうないこともあり、生家は解体し、その梁やケヤキの一枚板戸など象徴的な部分の一部を地域の集会所建設の際に転用することに

また、老母の七十年近く前の嫁入り道具だったたんすについても、誠実に対応してくれる職人さん

せき・よういち 52年紫波町生まれ。東京理科大学。商社勤務、誘致企業取締役、県中小企業支援センター・プロジェクトマネジャーなどを経て現在は中小企業大学校・高知工科大学大学院講師、盛岡市創業支援マネジャーなど。

んに補修を依頼した。祖父や父の面影とかぶる立手水鉢や井戸端の紅梅など、それなりの庭石樹木については一時的に造園屋さんに保管をお願いし、代替地が整い次第移す段取りをした。いずれも地域の皆さんに今後も見守っていただくことができそうなので、まずは一安心だ。

生家を離れて親不孝ばかりの私の場合、隣組や地域の介護関係スタッフの皆さんに老老介護の父母を長い間見守っていただいたことへの感謝の気持ちが今回の判断のモノサシとなった。

これと同列に論じるのは乱暴とも思うが、継続性の象徴とされる歴史的建造物の扱いについて、その当事者と地域の皆さんとの人間同士の絆の強さが、最後のよりどころになるような気がする。多分ユリおばさんも「そつごあんす、なつす」と言ってくれると思う。